

## 三つの“あ”

富永 勇三

20数年前、欧米派と自認していた筆者に、突然タイ国勤務の打診がありました。何故、今頃、自分がタイなのかと悩みましたが、東南アジアには住んだ事が無く、サラリーマンとして、最後の段階を未知の国で過ごすのも良いかと考え、お受けしました。

その折、タイ熟知の先輩より、タイで仕事をするには重要な「三つの“あ”」があると訓示を受けました。その「三つの“あ”」とは、“焦らず”“慌てず”“諦めず”でした。以後、23年間タイに住んでしまいましたが、絶えず、この「三つの“あ”」は大切にきて来ました。

タイ人によく言われる事ですが、日本人とタイ人を見分けるのは、歩く姿を見ていると判るそうです。即ち、せっかちに速足で歩くのは日本人、のんびりゆっくり歩くのはタイ人というのです。

これは、彼らが、バンコクをゆっくりと流れていくメコン川を見ながら育ったせいでしょうか、それとも暑くて早くは歩けぬ気候環境のせいでしょうか、理由は定かではありません。歴史を紐解くと、この地域はタイを除き、全ての国々が欧州列強の植民地になっているのですが、タイのみは何故か免れているのです。この理由を、多くの方々に聞いてみるのですが、納得の出来る説明は頂けておりません。

タイ人は粘り強く、したたかで、外交に強いのではないかと感じています。しかし、一方においては気候風土に恵まれ、何事にもマイペンライ（気にしない）と、のんびりムードで、こちらの怒りが倍増する事も多々あります。ある事象を捉え、日本にいるトップの方々は、タイに出向している社員に対し、「君、これは絶対に確かか」と聞かれる事がよくあります。筆者は、この様な上司の方には、「タイには絶対に確かはありません。しかし絶対に不可もありません。」とお答えするように進言しています。タイに「絶対に確かか」を求める経営者は、タイに進出しない方が無難とも思っています。

このような状況下で重要になって来るのが、「三つの“あ”」なのです。タイでは、国税庁とか関税局より、間違いの指摘や疑いをかけられ、多額の罰金の支払いを通知される事例が多々あります。多くは灰色のケースであり、担当官によりその判断が異なる事が多々あるのです。慌て、焦り、早く結論に到達しようと思えば、相手の術中にはまります。大切な事は、諦めないで、ゆっくりと落ち着き、腰を据えて相手と交渉する事なのです。

二年前には、人災とも言える大洪水も起こりました。その折のタイ人の笑顔を思い出して下さい。人々は、慌てず、焦らず、且つ諦めず、見事な対応をしました。せっかちはタイでは問題を起こします。

また、タイでクーデターが起こりました。「君、タイは絶対に安全か？」そんな事はあり得ないのです。自動車事故もあるのです。慌て、焦る事が一番禁物なのです。

タイへの進出は諦める、タイから撤退する、この国はそんなに早急に諦める必要はないのです。この国で何かをしようと思うのであれば、三番目の一番大事な“諦めず”を大切にきて進出して欲しいと念じています。

4月からは、海外ビジネスサポーターの後任を弊社の辻本浩一郎に託します。

永年のお付き合い、誠に有難うございました。

厚く御礼申し上げますと共に、益々の皆様のご発展を祈念いたします。